

高柳雄一

Thinking of the Universe

宇宙の公案10

撮影/飯島 裕



——「我々はどこから来て、どこへ行くのか」——
人は、永い間星空を見上げながら、この問いを繰り返してきました。そして、近代天文学の発達とともに科学の眼が拓かれ宇宙の姿はより明瞭となりました。しかし最近、宇宙科学の専門化が進むにつれて、逆に人々の暮らしの実感からは、宇宙への思いが希薄になりつつあるように思えます。宇宙の第十公案は、宇宙科学の成果とそれを伝えるメディアの役割について、NHKの高柳雄一解説委員に語っていただきます。

ともい知る宇宙

メディアが伝える宇宙

宇宙の公案、最終回はメディアで働く人間にお鉢が回ってまいりました。編集部からのテーマは、宇宙科学の成果を伝えるメディアの役割が今後どうなっていくのか、一般市民にとって宇宙について人間が広げてきた知の地平線が持つ意味をどのように伝えて行くのか、知が発見した宇宙の知識を共有することの意義、若い世代への教育のあり方まで含めた議論を期待しておられるようです。しかし私は、宇宙科学の知識を楽しみ、宇宙に触れていることの喜びをできるだけ多くの人々に感じていただく機会を生み出すことにより、そこから人それぞれが何かをつかんでいただければ良いと信じて仕事を進めてきたにすぎません。

確かに現代科学は宇宙の知の地平線を急速に広げています。それがもたらす膨大な情報が今日ほどメディアによって生々しく伝えられる時代はこれまでにありません。ですから一般に、メディアの役割はその現状を正しく伝えることにあるのでしよう。でも、私にとってもっとも重要なメディアの役割は、それが教育の場であれ、一般的な広報活動の場であれ、人々に私たちが宇宙と共に生きていることの確認をもたらし、自分の存在を支える宇宙の意味を絶えず問いかける機会を提供することにあると思っています。

いささか個人的な体験をベースにしていますが、そのことに至った理由を考えてみたいと思います。
学生時代、人生やこの世界、それは取りも直さず宇宙であり、その中の自分の生き方でしょうが、それが持つ意味に迫る宗教として禅の公案にとっても興味をもったことがあります。公案は、話し言葉

のやり取りで真実に迫り、知識だけでは伝えられない何かをつかむ機会を生み出すために工夫された問いかけだと理解しています。そこでは、問いかけをめぐる話し手、聞き手の表情・動作や言葉がとても重要な役割を果たすのです。

映像と言葉だけでは、確かに伝えられる内容に限界があります。知識や情報を誤り無く、正しく伝え、理解してもらうには読み直すことも可能な文字による表現伝達が勝っています。知識や情報の伝達には書籍や新聞・雑誌などの活字メディアの方がはるかに有効です。

私はテレビやラジオの番組を作るとき、知識や情報の内容を伝えることにあまり期待はしていません。このメディアには活字メディアに無い優れた特性があり、そちらを生かすべきだと考えるからです。話し手の表情や動作、肉声に含まれる話し手の心の動き、そんな言葉の内容以外にも含まれている情報、文字だけでは伝わらない何かをこのメディアでは提示することができそうです。

宇宙をテーマにした番組を企画制作するとき、私はそのことをいつも生かすように工夫してきましたつもりです。宇宙科学の最先端知識を紹介するテレビやラジオの番組でも、一番大切にしたいところは知識内容のわかり易い提示ではありませぬ。もちろん、そのことも大いに工夫してきました。しかしそれは、そういった知識や考えが、私たち人間にとってどんな意味をもつのか、それを理解する、あるいは感じるのに必要最小の知識内容に整理したものでした。番組は知識を伝えることが主要な目的ではないと考えているからです。

私たち人間にとって宇宙とは何なのだろう。それを考え、それぞれの立場から感じていただく。そんな機会をテレビや





ラジオで生み出すのが私の仕事であり作品でした。そして今も私はそれを続けていきたいと望んでいます。私のテレビやラジオの番組は、ある意味で、宇宙の公案そのものだったのかもしれない。

知識以前に知る宇宙

私たちは宇宙と共に生きています。いや、もっと正確には宇宙の一部であるはずです。なぜなら、私たちの体を作っている物質はどれもが宇宙誕生以来の歴史の中で作られてきたものですし、生きている体の働きも宇宙に存在する法則に従っているからです。

私たちが生きていること、宇宙がこんなにも深く関係していることに、私たちは日頃なかなか気づくことはありません。でも、もし何かの機会にそれに気づくことがあれば、生きていることの不思議さに驚かされるはずです。そして小さな自分の存在が、じつは大きな宇宙という存在に支えられているという実感をもつ方もいらっしゃるかもしれません。

私が宇宙に接した思い出の中で、その後の宇宙をテーマにした仕事に影響を及ぼした体験がいくつかあります。成長して宇宙という言葉に接するより以前に、私たちが人間は宇宙を感じる体験をしています。太陽や月の運行に気づき、満月を見て、そこにウサギの姿を探した幼児期の体験は、多くの人々が思い出として持

っているに違いありません。が、いつどこでそれをしたのか、私にはもう具体的に思い出すことはできません。はつきりと思いつける時と場所と置かれた状況の中で、宇宙と接したと私が感じたときがあります。それは第2次世界大戦の終わり近く、富山市内がアメリカ軍のB29編隊に空襲を受けた夜のことで、父が従軍記者としてインドネシアに行っていたときでした。

母と私は母の実家に住んでいました。場所は現在の富山市の中心部に近いところで、その夜、空襲で焼け野原と化し、燃えつづける火に囲まれた私たち親子は、比較幅のあるドブ川の水面下に身を浸して朝を待ちました。川のすぐ側にあつた大木が燃え上がり、地表が赤々と映えていたのを子供心に覚えていて、朝を無事迎え、命が助かった後、母はあ

の木が倒れてきたときが二人の最期だと覚悟していたと語ってくれました。そんな大変なときに私は燃え盛る木の頭上に輝く明るい一つの星を見つめていたのです。子供心にも私たちがやがて火に包まれるという状況を感じていました。でもとても不思議なことに、そのとき、私は自分とあの星が同じ世界で時間を共にしているのだと、その星に自分の分身

のような感じを抱き始めていたのです。まだ小学校にも入っていない頃の忘れられない体験でした。

中学生の頃、ロシア生まれの物理学者ジョージ・ガモフの魅力的な現代物理学入門の啓蒙書に出会いました。当時、和歌山市に住んでいたのですが、学校への道すがらにあつた書店を覗いては、次々と発売された彼の新しいシリーズ本を待ち望んだものです。中でも「太陽の誕生と死」を読んで、核融合で輝く太陽がやがて赤色巨星となり、白色矮星として死を迎えるという新しい知識に触れ、興奮して、ほとんど一晩眠れなかったことを覚えています。幼児期の星に命を感じたことが、ある意味では科学でも説明されるということに圧倒されるような思いをもったものです。

科学的知識がもたらす宇宙

大学に入って物理学科に含まれていた天文学課程に進んだのも、子供の頃から宇宙への問いかけを続けたいという気持ちがあつたからだだと思います。大学院では宇宙の中でも私たち地球の生き物の存在ともっとも関係の深い太陽層の物理を学びました。そして、社会に出て働くことになったとき、それまでの経歴を生かすため、マスメディアで科学という人間の営みを社会に伝える仕事を選んだわけです。ですから、最初は物理や化学、生物、そして地学など、科学の全分野にわたり、主として高校生向け教育テレビやラジオの番組の仕事に10年ほど担当したのでした。

教育番組を長く手がけた経験はその後の仕事にたいへん役立ちました。担当した番組が講座番組であつたこともあり、番組の主たる目的は科学の内容をテレビやラジオの特性を生かして分かりやすく伝えることでした。この仕事を通じて、科学知識をテレビやラジオで伝える時の問題点、とくにどの点が欠点で、どこが優れているかを具体的に知ることができたと思っています。ことに、活字メディアが対象とする人々はすでに読むという姿勢で、記された内容を知りたいという積極的姿勢を期待できることは、たいへんうらやましいことでした。

テレビやラジオといったメディアでは伝える内容を分かりやすく整理して送る以前に、如何にして、そのことが受け手にとって興味深いものであるかということに気づかせることがとても重要な作業だったのです。映像と話し言葉で知識を伝えるとき、まず必要なことは聞き手に、その話しを聞きたいと感じさせる場を作り出すことなのです。

地学の番組で「星の進化」がテーマになつた場合を考えてみましょう。番組を見ていただく人々に伝える内容は、もちろん、教科書や参考書に書かれている星の進化についての知識であることは事実です。でもラジオやテレビでは盛り込める内容は限られているうちに、それに興味を持ってもらえなかつたらスイッチを切られるかチャンネルを変えられる恐れをいつも抱えています。たとえ、視聴しただけでも、聞き手が聞くことに意欲を感じない場合、内容がどれだけ伝わらなかつたか疑問です。

番組で星の進化を伝えるには、それを知ることが聞き手にとってどんな意味をもたらすのか、最初に関心をもってもらふ作業が必要なのです。使い古されたようでもありますが、「人は星のかげら」と言われているということから始めることもできます。大切なことは星の進化という現象が、単に夜空に見える星の話しに

取材現場で感じることは「場」のもつ力の重要性ですね。
放送メディアの勝負の分かれ目は、現場の雰囲気がいかに伝え切るか。
たとえばインタビューで、ふと話題が途切れて間が空いたときに
これを気まずいと、慌てて何かを喋ってしまうよりも
むしろ、その沈黙をいかに説得力のあるものにして伝えられるか。
つまり、その静寂の「場」を電波に乗せる力が試されるのです。



限らず、宇宙の生命の存在に関係し、ひいては私たち人間のルーツにつながる話題だと、まず知ってもらうことが聞き手に興味を抱かせるためには役立ちます。ですから、私は宇宙についての何かを伝え、その何かを感じ考えてもらう機会を作りたいとき、その宇宙についての何か

が、自分の用意する機会に参加する人々にどんな意味をもたらすのだろうかという事も自問自答し、そのことを最初に理解してもらいように番組の構成を考えています。もっと知りたい。もっと見てみたい。そんな望みを持ってもらえば、たとえ番組中で伝えられる情報内容が少ないうえ、その何かについても私は自分の役目を果たしたと思っと思っています。知りたい人、調べたい人には世の中にくらでも優れた書物、時には先生方がいらっしやるのですから。どんなことにも欠点はある、多くの場合、それをうまく使うと長所にもなりませぬ。ラジオやテレビで何かを伝える場合、興味をもって受け手に参加してもらおうとの必要性を自分の体験を通してお話ししましたが、逆に情報の内容そのものを伝える作業には限界があるかわりに、テレビやラジオのようなメディアは、情報内容に興味を抱かせ、注意を喚起する素晴らしい手段となりうるのです。新月の夜、満天の星に包まれ、宇宙に触れたような子供の頃の記憶を呼び覚ます夜空の映像は、どんなに文字を重ねても描けるものではないですね。それに虫の音が加われば時間の流れを忘れて宇宙に思いを馳せる方々もいらっしやるかもしれません。映像の持つ魔力がそこにあります。宇宙が人間にもたらすさまざまな意味合いをみんなで感じ、話し合う機会を、このメディアは擬似的にしろ作り出すことができるのです。ほとんどすべての科学分野の知識を紹介する教育番組を手が

けた後、総合テレビの仕事に移った私はこうした体験を活かして、一般の人々に見てもらう宇宙の番組に取りかかる機会を待ったのです。

私たちが共に生きる宇宙

1990年の春から放送したNHKスベシヤル「銀河宇宙オデッセイ」シリーズは、こうした背景の中から生み出されて行きました。最近、時々、宇宙科学や宇宙工学に携わっている何人かの若い人々から、私はあの番組を見てこの分野に進もうと思いましたがという話しを聞くことがありました。私たち製作者の意図は見事に果たされたと言っています。このシリーズ全体で、私たちが意図したのは、当時の最新の宇宙科学情報を整理し伝えることだけでなく、視聴していただいた人々に、宇宙の存在とそれが人間にもたらす意味を考えてほしかったのです。見た人の中から宇宙への問いかけや働きかけをする人々が現われていたことは、そのことが多少なりとも有効に働いたことを示しています。

この企画を考えたとき、私の頭の中にはシリーズの展開で西遊記を使えないかという思いがありました。西遊記の物語はみなさんご存知のようにさまざまな要素が織り成しています。人間存在の悩みを解決するありがたいお経を天竺に求めて波乱万丈の求道の旅を続ける三蔵法師。この世の真理を求め旅。そこに展開される不思議な世界……

「銀河宇宙オデッセイ」は「我々はどこから来て、どこへ行くのか」という求道的ともいえる合言葉のもとに、架空の宇宙船へリオスの旅を巡って、宇宙のさまざまな局面に迫る科学者たちの研究を紹介した番組でした。そこでは、波乱万丈

の知の冒険が繰り広げられました。西遊記の旅が求めたものも宇宙の真実だと考えるとこの対比は肯けるものでした。

西遊記を借りた最大の理由は、最後の結末にありました。天竺で手に入れたありがたいお経は白紙のお経でした。宇宙の真実を求めて旅したヘリオスの旅の結末も答えが出てくるものではありません。問いかけの旅がようやく手にする白紙の答案、さらなる問いかけの旅にいざなわれることに、私は宇宙と共に生きる命のあり様が暗示できると思ったのです。その絶えざる衝動が宇宙に足場を作り、膨大な観測網を広げつづけているのです。

人間が知識として捉えた宇宙は、神の創造であったり、自然の創造であったり、科学の発展と時代の流れに応じてさまざまに変化してきました。今、多彩な科学の言葉で描かれた宇宙、その中で生きる知性にとってそれはいつまでも問いかけをいざなう存在であるような気がいたします。いつまでも正体を見せない

れど確実にそこにあるもの——宇宙——。そこにこそ、人間は知の理解を超えて、宇宙と共に生きていることを感じるのではないのでしょうか。今回の公案、小さな一人の人間のつぶやきとして、みなさんにお届けしたいと思います。公案には答えはありません。答えは自分が見つかるものです。

「未完」——。



高柳雄一 (たかやなぎ・ゆういち)

1939年富山県生まれ。日本放送協会(NHK)解説委員。1983年インドネシア国営放送との共同制作「黒い太陽を追って」(アジア太平洋放送連合特別大賞受賞)、90年「銀河宇宙オデッセイ」シリーズなど制作、日本の天文・宇宙科学分野における放送ジャーナルの第一人者。現在も天文系・気象系番組のNHKの顔として活躍。「天文学者といっても、いろんな人がいますね。とくに宇宙論研究の分野には、まさに禅宗の作家(そけ)然とした教授がいらっしやるかと思えば、こりゃ老拙だって先生もおられる。宇宙は、いつの時代も絶好の修行の場なんですね」